



携帯電話で大変便利になった...!?

福田 隆治

お寺での庭師の仕事を終えての帰路、携帯がなった。「ヤギの子が2匹生まれたが、敷きワラを用意しようか」「生まれたつうことは、元気なんだな、親がついておれば、よけいな手を出すことはないと思うよ」

ところで、逆子などで難産の場合、「画像を見せてくれ。こりゃー、無理だ。引っ張れよ」というような活用ができる世の中となった。

その日の夜、ヤギの親子のけたたましい声が、晩酌で一杯気分の耳に。普通ではない。懐中電灯を手を駆けつける。わが家から50メートル。途中でタヌキが道をよぎる。子ヤギが1匹しかいない。遠くから細くカン高い鳴き声が。懐中電灯で走り回る。やみ夜の中の自然の出来事に、携帯は使えない。下手に動き回るのはやめ、呼吸を整え、全神経を耳に集中。結果は、穏やかな天気とヤギの白い色も幸いし、無事保護した。

携帯電話はどこからでも音声と映像を伝送し記録もしてくれる。ただ人間の意志のとどく世界での話で、自然の出来事に対しては当てになるわけではない。

かつて、大学野球をやっていたころ、不思議な人に出会った。梅村魁先生。“現場魔”のような人で、耐震工学・建築の大先生ということだった。世界各地で起きる震災の現場を見るために、場合によっては自費でも駆けつけるような人と聞いた。そんな学者先生が役回りかどうか知らないが野球部の責任者になられた。野球は素人といわれたが、シーズン中の20余試合は(土・日)欠かさずベンチ

でプレーを黙って静かに見ておられた。部長先生の立場の人がベンチに来られるのは年に1～2度の時代であった。それこそ、年に1～2度と言え、雲の上のような先生が、シーズンが終わると、自宅をサロンとして解放、部員を招かれた。間があくと、「君は何処の生まれかね」とその選手の故郷の民謡から歌謡曲まで、リクエストにすべて応えて、生オケで歌われた。歌の生き字引のような不思議な学者先生だった。

8年ぐらいまえ、喜寿のころだと思うが、亡くなられた。葬儀にでた。先生がみんなと飲んだ時の歌(テープ)が読経の代わりに流されていた。携帯やインターネット世界ではない直接の触れ合いの世界の大切さを教わったような気がする。

話がとんで恐縮だが、「オレオレ詐欺」に注意を呼びかける有線放送が、このところ連日流されている。この辺で多発しているとのことだ。我が田舎は自慢ではないが、全国より何事も数年遅れて流行する。赤の他人ならまだしも「オジちゃん、オバちゃんスゴイ」と持ち上げる。「血縁セールス」も幅をきかす。売り物は「健康」「宗教」。孤独や病気の年寄りには効果満点だ。赤子の手をひねるようなものだ。厚かましく病院まで来て、契約書などを勝手に自分で作る。

さて、田舎の葬儀の典型例を紹介したい。一人暮らしの年寄りが死んだ。都会から定年前後の大きくなった子供達が2～3日駆けつける。葬儀は小さな集落(10軒ぐらい)の年に1～2度の地域交流の場となり、都会に出た旧友との形ばかりの出会いの場となる。この辺では葬儀となるとどんな忙しいときでも太鼓判で会社を休める。また、空き屋が増える。故郷の野山や田畑も荒れてはいるが、人の気持ちも寂しい。触れ合いも少ない。拝金宗教や悪徳訪問セールスにとってはオイシイ所と思う。介護や医療関係者がこのような団体とつるんで、巧妙なやり方でせまれば、弱いものはイチコロである。どんなことになる

のやら。はずかしながら、訪問セールスの一件はわが家の最近の出来事である。

ここで携帯が活躍してくれた。知り合いにあらかじめ電話をする。セールスマンを返品したいと呼び付ける。やり取りは映像と音声で記録され知人と共有。最後に「実は」とセールスマンにきり出す。携帯を見せる。顔を引きつって帰る。詐欺や陥れには携帯は最高の武器になる。家庭内暴力や社内暴力にも。使い方で弱者の武器になる。

故郷に帰って、6年生の私。集落放牧の言い出しっぺで、初めての牛飼いの他にもこのように退屈しない毎日。山菜＝自然の物＝ただの物を朝市に売っても最低時給にも見合わない。生業はと問われれば、葬儀やのバイト（数件重なると社員では対応できない）、庭師（経済的余裕のあるじいさんばあさんのガーデニングのお世話）、農繁期の手伝い（息切れしそうな方の助っつ）、山菜の朝市出荷。しめて100万円前後。健康保険だけは請求書がくるが、その他税金とは無縁。国民年金は全額免税。たまの買い物は賞味期限前後の半額シールねらい。肉も魚も贅沢にいただいている。老人や山菜をクイモノに生活しているが、サラリーマン時代の味気ないころを思えば、味気ある毎日である。旨い、甘い、苦い、辛い、酸っぱい、塩っぱい、渋い。

20年前、NIRA（総合研究開発機構）で農業を工業の理論で、農業に夢を与えようとした「農業自立戦略の研究」の最終場面にタッチした。「自然てのはそんなにいけますかね」「いや一応、工業的な切り口での話だから」「そうですか」と味気ない会話であった。上司やら友達から「おまえは自分の考えで白紙のキャンバスに好きなように絵をかけ」と言われ、何もかけない自分にモンモンとした2年が過ぎた。通勤電車で吸い込まれたい思いも、今は懐かしい。「研究者の資質」について、先輩や同僚に尋ねた。「強引さ」「熱意」「好奇心」「謙虚」「現場」「根回し」「金」等。でも、強情で不勉強な私は「素人にも分かるモノ」をアウトプットできるかどうかを判断基準（私

の最後の逃げ場）として人と接した。今日、コンピューターによりデータ処理はすごいことができるようになったが、研究分野はさらに専門化細分化し、チンプンカンプンとなったようだ。

駐村研究員4年生となり、関係の方と誌上や、年1回の懇親会の席で、交流でき、刺激的であり、もうちょっと俺も頑張ろうかという気持ちだ。

我が集落放牧の牛たちに“この辺のところ（情報化社会の行く末）”の感想をたずねてみたが、聞き方がまずいのか、返答は？だった。

（島根県大田市・農業）

私の酪農新規参入体験記

高木 文生

北海道・十勝地方の西北部に位置する新得町に東京から移り住んできて7年、昨年8月に、念願であった酪農での新規就農を果たしました。今回はその過程で感じた新規参入への問題点に触れつつ、経緯をお話させていただきます。

1. 酪農研修

私の酪農生活のスタートは、新得町立の農業研修施設「レディースファームスクール」で始まりました。ここは1年制の女子寮で、朝と夕、割り当てられた酪農家（3カ月ごとに変わる）のもとに通って実習を積みつつ、週1回の講義で農業の基礎知識を学んだり、実習畑で野菜作りをしたりするカリキュラムが組まれています。実習といっても労働時間帯と報酬は一律で決まっています。短期生以外は個室を与えられ、食事は朝は農家で、昼と夕は寮で用意されます。

このような恵まれた環境で全ての酪農研修が行われていればよいのですが、昔ながらの低賃金、長時間労働、住み込みという厳しい環境で研修を積む実習生も道内各地にはまだ少なくないようです。慢性人不足といわれる酪農業界ですが、夢を持って渡道してきた若